

特集

多彩な活動を展開する文化ボランティア ～コーディネーターの存在がさらなる活性化の鍵～

■多彩な文化ボランティアの活動実態

「文化ボランティア」と聞いて、どんな活動をイメージするだろうか？美術館や博物館などの社会教育施設での活動を思い浮かべる人が多いかもしれない。「大好きな文化・芸術に関わるボランティア活動がしたい。でも、専門的な知識や技術が必要なのでは？」という声も聞こえてきそうだ。

文化ボランティアは、2002(平成14)年、当時の河合隼雄文化庁長官の提唱により、活発化したと言われている。河合長官は、文化ボランティアを「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が楽しむのに役立ったり、お手伝いするような活動」と述べている。

JVCAの理事であり、財団法人鳥取県文化振興財団 文化芸術デザイナーの柴田英紀さんによると、文化ボランティアの活動の場は、①美術館・博物館、②公共ホール等、③生涯学習、④フェスティバル、⑤アートNPOの5つに大別できるという。その他には、まちづくりや地域振興により、地元の文化財、町並み保存、廃校利用など、地域における文化資源の有効活用の観点から活動を行う団体も多く見受けられるようだ。そこで、ここでは2006(平成18)年度文化庁「文化ボランティア活動実態環境調査報告書」をもとに、その活動を紹介する。

＜団体向け調査結果の概要＞

1) 活動者プロフィール

7割が女性。40歳代以上の主婦が主な担い手。男性は60歳以上の退職者が約6割。主婦、退職者に続き、会社員が36.8%となっている。学生は15%と少ない。

2) 活動内容…対人交流型の活動と裏方の活動

活動内容は、「舞台設営、公演・イベントの準備、運営補助」が35.5%と最も多い。次いで「会場整理・案内・切符もぎり」が34.5%、「ガイドボランティア」が30.8%と高い割合を占める。

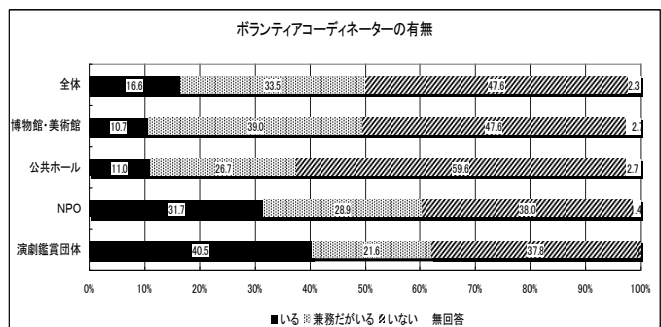
団体種別ごとで見ると、それぞれ最も多い活動内容は、博物館・美術館では「ガイドボランティア」、公共ホールでは「会場整理・案内・切符もぎり」、NPOと演劇鑑賞団体では「舞台設営、公演・イベントの準備、運営補助」となっており、対人交流型の活動にとどまらず裏方の活動も行われている。

その他、具体的な記述があったものとしては、歴史資料・古文書の解説、楽器演奏、戦争体験の語り部、わらべ歌の指導といった専門知識や経験を活かした活動などが見られた。

3) ボランティアコーディネーターの配置…過半数で配置されているが…

全体では、ボランティアコーディネーターがいる、もしくは兼務だがいると解答した団体が過半数を占めたが、そのうち33.5%は兼務での配置である。団体種別ごとに見ると、公共ホールでは「いない」と解答した団体が約6割であった。

ボランティアコーディネーターの役割を担っているのは、美術館・博物館では学芸員が主に担当し、公共ホールでは企画や舞台技術等の職員が担当することが多いようだ。



4) 活動の効果…地域社会との関わり

文化ボランティアによって、どのような効果をもたらされたかという質問に対して、最も多かった回答は、「地域住民の理解や関心、協力、参画を集めることができた(42.9%)」であった。次に、「社会の理解や関心、協力を集めることができた(40.6%)」が続き、地域や社会との関わりの変化がはかられたことを効果として捉えていることがわかる。

5) 活動における問題

最も多かった回答は、「活動者が高齢化している(47.7%)」であり、特に演劇鑑賞団体、博物館・美術館で高かった。

2番目に多かった問題は、「新しいボランティアが集まらない(31.8%)」である。しかし、演劇鑑賞団体、NPO、公共ホールではこの問題が高い割合を占めているのに対し、博物館・美術館はそれほど高くない。このことから、博物館・美術館はボランティア活動の場としてイメージしやすいためか人気があり、ボランティア募集にそれほど苦労していない一方で、ホールやNPO、演劇鑑賞団体ではボランティア募集が大きな問題であることがうかがえる。

3番目は、「活動に充てる資金が不足(23.2%)」で、特にNPOでは資金不足の問題が突出して高い。

＜活動者個人向け調査結果の概要＞ ※次ページの表

1) 活動を始めた動機と参加して良かったことの比較

活動を始めた動機と参加して良かったと感じていることを比較した結果は興味深い。「文化・芸術に興味があった」という動機をもつ人の割合と、活動の結果、「文化・芸術に触れた」ので満足、という人の割合はほぼ同じであるため、期待通りの満足感が得られたと言える。しかし、活動前より活動後かなりの割合で高くなっている項目がある。それは、①いろいろな人と知り合いになること、②社会勉強になるという2項目である。特に①は、それほど動機としては高くなかったが、文化・芸術に興味があって活動を始めたが、実際活動に入ると、人と知り合えるという副産物が付いてきたことで、多くのボランティアは参加して良かったと感じているようである。

2) 継続していくうえで望むこと

最も多い回答は、「ボランティアの養成・研修機会の充実(47.5%)」で、半数近くを占めている。文化ボランティアの場合、専門性が求められる場面も多いため、活動を通じてその必要性を実感していると考えられる。次に、「ボランティア活動への経済的支援(37.0%)」が続く。

3) 支援機関利用の状況

ボランティアセンターや市民活動センター等の中間支援組織について、利用した経験のある活動者は約3割に留まっており、存在自体を知らないという回答も6.8%あった。

■文化ボランティアをより活発化させるために

調査結果を見てきたが、「文化ボランティア」と一言でいっても実に多様な現場で多彩な活動がなされている実態が見

て取れた。調査結果から浮かびあがった課題や特徴から、さらに文化ボランティアを活発化させ、質を高め、環境整備を進めるための方策を考えたい。

(1) 先を見通した視点をもつコーディネーターの必要性

まず一つめに、活動における問題として挙げられていた「活動者が高齢化している」「新しいボランティアが集まらない」という問題や、継続していくうえで望むことで挙げられていた「ボランティアの養成・研修機会の充実」などは、丁寧なボランティアマネジメントを実施していくことで、改善できるのではないだろうか。ボランティアコーディネーターは半数の団体に配置されていたが、兼務の場合も多く、なかなか時間をかけて丁寧なボランティアマネジメントに専念する体制が整っているとはいえない状況である。現在活動中のボランティアへの支援に加えて、数年後を見通したうえでボランティアマネジメントを担う知識とスキルをもった人材の配置や養成が必要である。

(2) 中間支援組織等との連携で広がる可能性

また、地域のボランティアセンター等を介さずに直接活動の場につながっていることも文化ボランティアの特徴ではないだろうか。地域のボランティアセンターがあまり知られていないことは中間支援組織側の課題でもあるが、文化ボランティアの現場と中間支援組織がお互いを知り合うことにより、ボランティア募集や研修機会の提供などの問題解決につながるだけでなく、新たな連携が生まれる可能性もある。

文化ボランティア活動を始めた動機	(%)	活動を通じて得られた満足や良かったと思っていること	(%)
文化・芸術に興味があった	60.6	文化・芸術に触れられた	62.5
社会勉強になると思った	41.7	見識を広げることができ社会勉強になった	64.5
社会に役立つことをしたかった	45.7	人や社会のために役立つことができた	51.7
時間を有意義に過ごそうと思った	24.8	時間を有意義にすごせるようになった	31.7
色々な人と知り合いになりたかった	19.3	色々な人と知り合いになることができた	61.3
専門知識や特別な技術を身につけたかった	9.1	専門知識や特別な技術が身についた	18.4

<<文化ボランティアコーディネーター養成講座in可児報告~参加者の視点から~>>

(JVCA運営委員 山方 元)

2010年1月23日(土)~24日(日)岐阜県可児市の可児市文化創造センターを会場にして、日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)主催「文化ボランティアコーディネーター養成講座」が開かれた。講座に参加されなかった方々にその結果をお知らせするとともに、この養成講座に参加して感じた成果と今後の課題について僭越だが摘記する。

1日目の午前には代表理事妻鹿ふみ子さんの基調講演「市民社会とコーディネーション」で始まった。ボランティアとは何か、なぜボランティアなのかについて、参加者にあらためて問いかけ、妻鹿さん自身がボランティアへ関わった個人的

な経験も交えながら、「ボランティア」について参加者自身が考え、意義と問題点を共有するためにじっくり時間をかけて話され、私たちがめざす市民社会とその実現のために必要となるコーディネーターの役割について説明された。午後は、2日目の分科会担当者がパネリストになり、各分野のボランティアコーディネーションの現状と課題について討議した。

そして初日の最後は、JVCA理事柴田英紀さんの講義「文化ボランティアコーディネーションとアートマネジメント」。柴田さんが所属するNPOが文化庁から受託して実施した「平成18年度文化ボランティア活動実態環境調査」をもとに、ボ

ランティアコーディネーション及びそれを推進するボランティアコーディネーター人材の必要性和、求められるコーディネーター像の提言をされた。

1日目の終了後、同センターのご厚意で「バックヤードツアー」や、冬期にセンター前の広場を華やかに彩るイルミネーションの「点灯式」を設定していただいた。その後、懇親会が行われ、センター館長衛紀生さんの歓迎スピーチと、センターで活動するNPO法人alaクルーズメンバーによる音楽演奏でもてなしてくれた。

2日目の午前と午後は、(A)美術館・博物館 (B)フェスティバル (C)生涯学習 (D)アートNPO (E)ホール運営の5つの分科会に分かれて、ボランティアコーディネーションを先進的に取り組まれている方々の事例発表やミニ講義、グループワークなど、様々な形式で研修が行われた。

私は(E)ホール運営に参加した。中堅管理職幹部によるアートマネジメント人材、ボランティアコーディネーター人材育成に必要なコミュニケーション活動のために必要なファシリテーション・スキルについて参加型・体験型で学ぶというも

のだった。この分科会内においても、行政職・公立文化施設職員・指定管理団体・指定管理団体希望者・文化ボランティア(NPO)など、多様な立場の方々が多様な動機で参加され、交流を通じた信頼関係から生まれる白熱した討論により、気づきや学びが徐々に深まり、これからの活動の改革のエネルギーが生まれてきた。JVCCの再現のような分科会に近づけたと思う。

最後に総括研修として、各分科会担当者からの報告を行い、その後妻鹿さんによるコメントで全体を閉じた。

今回の養成講座の成果だが、1日目に多様な参加者との共通理解を固め、2日目の各分科会も熱心な討議が行われ、参加者の期待に応えられる講座になったと高く評価できる。講座開催に先立ちJVCA内に設置した「文化ボランティアコーディネーター活性化委員会」によるプログラム開発が十分にされた結果であると思う。また今回は78名の方が参加されたが、今までJVCAの講座に参加してこなかった層が相当数参加された。JVCAが文化ボランティア領域において貢献できる自信と足場を得られたと思う。

■文化ボランティアに横串を！—コーディネーター人材のネットワークと連携— 柴田 英紀 (JVCA理事)

文化芸術分野にボランティアが導入されたのは、なんと昭和30年代である。先駆けとなったのは、言うまでもなく公民館・図書館・美術館・博物館などの社会教育施設であり、市民のボランティアな力を事業運営に活かし、先導的な役割を果たした。展示解説、演示活動、読み聞かせ、鑑賞指導など、活動内容は多岐に渡ったが、ボランティアという名称や概念は明確ではなかった。昭和50年代以降、公立文化会館の建設ラッシュに伴い、ボランティア制度を導入する会館が、ホール運営や舞台技術などでボランティア活動を実施した。近年、全国に4千を超すといわれるアートNPOが台頭し、アートを通じて福祉、教育、医療などの目的で活動を行うボランティア領域が一気に多様化している。

文化ボランティアという名称が世に出て9年、文化ボランティアコーディネーターはまだ2年の月日しか経っていない。文化芸術に馴染みがない方にとっては、抽象的で難しく捉えられることも少なくないだろう。定着するまでにはまだ相当時間がかかる。しかしながら、文化ボランティアの提唱により、社会教育施設、公立文化会館、アートNPOの関係者たちが一同に会してつながりをもつ動きが芽生えた。お互いを認識し始め、違いを確認し合い、勉強会や研修会を催すことが多くなった。活動内容が顕在化したことで、文化ボランティアの存在意義を地域社会に知らしめたこととなり、一定の成果が見られた。

1月に実施した養成講座では、参加者自身が文化ボランティアコーディネーター人材かどうかはわからぬまま、半信半疑で参加した方も多く見受けられた。2日間の研修を終え、参加者は活動の検証と共に、自らがコーディネーター人材であるということを確認して帰られる結果となった。収穫は人材の顕在化であり、段階的な意識啓発が促されたのだと思う。「やっぱり間違っていなかったんだ。みんなも同じ悩みを持っているんだな。こんな解決方法もあったのか。」このような感想から、人と人が出会い、つながることによって、いろいろな共有財産が生まれたことが理解できる。

文化ボランティアの歴史を紐解けば、社会教育施設は55年、公立文化会館は35年、アートNPOは12年である。活動の歴史が長ければ長いだけ、組織は停滞し硬直化も招くだろう。どこの組織にも垣間見られる現象だ。この状況を打破し、新しい文化ボランティア像、コーディネーター人材像を描き続けるためには、「ネットワーク」「他領域との交流」「新しい刺激と発想」これら3つのポイントを強化していくことが今日的な政策課題なのではないかと考えている。

